

華の学生生活

大学時代は、長い人生の中で最も貴重な時間の一つ。
何のために大学生を送るのか、
新しいスタートの時期である今、改めて考えてみませんか。
目的を持って大学生を送っている先輩たちからいただいた、
みなさんへの応援メッセージを紹介します。

Student Clinician Program

***** 歯学部 * 歯学科 信田 智美

私は3年生の時に掲示板に貼ってあったポスターを見て、この研究発表会のことを知り、前年度出場した先輩の学内発表会を見学したことが出場のきっかけです。

この研究発表会の目的は、日頃の歯科医療（臨床医Clinician）について、歯学部生(Student)の視点で観察し、課題を見つけ、これについて研究することです。発表は英語で、テーブルクリニックという特殊な形式で行われます。テーブルクリニックでは、ポスター掲示の他に、テーブル上に模型や装置を展示し、これらを用いて発表中に実演・説明することができます。全国の各大学歯学部からの代表1チームが、東京都にある日本歯科医師会館において各々の研究を発表します。そして、日本を含めた各国の優勝者は、アメリカ歯科医師会への招待を受け、研究発表の機会を得ることができます。

新潟大学歯学部では、興味のある学生であれば誰でも参加することができます。研究発表にたどり着くまでには、多くの時間と



本人は前列左から2人目

手間がかかります。当日の発表者(Clinician)とサポートメンバー(co-Clinician)がチームを作り、放課後・休日を費やして研究に取り組みます。

私はClinicianとして2度の発表機会をいただき、各3人のco-Clinicianと出場しました。

発表会場では全国の歯学部生の発表を聞き、大いに刺激を受けました。発表後には交流会があり、互いのチームの苦労談などを話したりします。すると、数時間話ただけで、その日初めて会った人とは思えない程に打ち解けます。そんな仲間の中から代表者が選ばれ、アメリカで発表します。

歯学部では、講義・実習がぎっしりと詰まった学生生活を送ることができます。また、研究・部活・アルバイトをすることで、さらに充実した時間にできることを知っておいてください。学生生活で与えられる多くのチャンスを生かして、自分が興味を持ったことを試してみてください。



本人は左端

大切なもの

***** 教育人間科学部 * 学習社会ネットワーク課程 清水 千恵

私は、世界に携わりたい、国際関係の仕事に就きたいと思っています。日本と世界をつなぐことに関わっていききたいというのが私の夢です。だから、国際関係や語学などにはすごく興味がわきます。そんな私が大学に入学する際に選んだ初修外国語は中国語でした。そして、偶然にも私の所属する課程では中国での国際交流事業が行われていました。私は国際交流への興味と中国への興味でその事業に参加することをすぐに決めました。この事業では、中国のいくつかの大学の学生と交流を行うのですが、その交流の中ですごく印象に残っていることがあります。それは、中国の学生が「正しい目で我々の国を見てほしい」と言ったことです。現代において、私たちは報道などで得ることだけを全てと捉えてしまいがちになってしまいます。しかし、報道されていることは決して全てではなく、ほんの一部に過ぎないのです。中国の学生は、中国で起こった反日デモはほんの一部の人間が起こしたことだと言っていました。世の中に溢れる情報のみで外国を見るのではなく、正しい目で外国を見ることが今もそしてこれから先もずっと大切なことなのだと感じました。この国際交流事業で得られるものは私にとってとても大きいものだと思います。だから、1年2年と参加し、このまま3年4年も参加したいと思っています。

大学は自分の意思で行動できる自由なところと言えます。だからこそ自分がやりたいと思ったことなど好きなことがいくらでもできます。しかし、自分が動かなければ何も始まりません。大学では、自分の意思というものが非常に大事になってくると思います。興味を持ったことに積極的に取り組むなど、思うことを何

か行動にうつしていくことで自分自身がひとまわりもふたまわりも大きくなれるところだと私は思います。夢に向かい、後に振り返ったときに、自分の大学生活は濃くて有意義なものだったと言えるような大学生活を過ごしていただく。



中国深圳の町並み



中国珠海：北京師範大学珠海分校にて。学生と。本人は中央



中国北京:故宮にて
本人は中央

華の学生生活

Study Abroad: the Sweet and the Bitter

***** Graduate School of Science and Technology * Ould Elemine Cheibany (Mauritania)

Ever since my elementary school years, like any other African kids, my dream was to study abroad, be a doctor and discover a new horizon. My dream came true when I was granted a scholarship for graduate studies in Japan after the four years of hard work at a university in Mauritania, my country.

The opportunity to study in Japan was not really my wish because of a language barrier, the lack of information about Japan, and in addition its location that is far away from my home country. However, I accepted the challenge. For us, Japan meant the country of *samurai*, *sumo*, computers, and cars. Thinking about the work ahead, I was anxious but also excited to discover a new life style and a new way of thinking and finally meet the samurai. I really expected to see a samurai right after I go out of the airport. Instead, I met a nice Monbusho staff whose French competence was only "Je t'aime." For me, landing after a two-days trip, with no more than two Japanese words in my head, this signaled the beginning of the challenge. The first few days getting used to my new environment was the most I could do. It was my first experience that I had to spend more than 2 hours in a room by myself. Growing up in a large family with many brothers and uncountable number of cousins, being alone was a strange experience but I enjoyed it for a while. I must say that I enjoyed the international environments I was in, many people from all over the world, new friends, many places to visit, parties, and lots of *kanji* to memorize, too. I particularly enjoyed the discussions and chats I had with students from a volunteer circle of Niigata University even though I needed to mix some French, English and some broken Japanese to express myself. They seemed to understand me even when I couldn't understand myself. I never worried about doing everything right at the first. I only needed to try to express myself as it was the challenge.

The first months were full of joy and surprises, that is, memories that will remain forever with me. I went out to a convenient store to buy sugar but bought salt or brought vinegar instead of oil, or confused *ninjin* for *ningen*. For a foreign student, there will be also moments of tears and sadness when homesick little by little sets in. Sometime you may ask yourself over and over again, 'why am I here? Can I make it?' Even though you may not immediately find the right answer, you will somehow find the strength to keep going. Why? You made it here and surely have the strength to make it through and out of here.

As time goes by, I came to get accustomed to my new life style, and now understand how things go. I owe this to the supports of the Japanese and foreign friends I made but also the communications and chats with my supervisors. Many of you will find it sometime hard to get hold of your teachers, but you should never get disappointed. After all, it is your supervisors who are responsible for your studies as they are the one who have accepted your application.

Some in the administration or other research group people may act cold to you or seems not to understand you when you try to communicate with them. Do not feed desperate or repulsed. Just remember that you could have the same problem even at your home country in an opposite way. Make yourself understood as clearly as possible or simply ask others for help.

My big surprise was the amount of free time Japanese students enjoy. In Mauritania, after an entire year of hard work one is still unsure whether he will make it to the next level. In Japan, university students spend a year almost like a vacation and don't seem to be nervous about their grades. While in many countries study at university means years of hard work, in Japan it is taken as a time for "playing and traveling."

Trip to Sado Island with Foreign Friends (本人は正面)



Cherry Blossoms Party at the Bank of the Shinano River (本人は右奥)



snowman design in front of cafe1



自分に合った場所を見つけて自分なりの学生生活を

***** 農学部 * 応用生物化学科 * 新潟大学プレスそよかせ 田中一也

新入生のみなさま、聞き飽きてしまったころかもしれませんが、ご入学おめでとうございます。今年も新たな後輩たちが入ってくることを素直に喜んでいます。

我々のサークルについて少し説明をさせていただきます。「新潟大学プレスそよかせ」は、新潟大学唯一の公認学生新聞です。中門のサークルK脇の「nipponキャンパス館」に編集室があり、日夜活動に励んでおります。発行は隔月で、学内の各所のみならず、周辺の地域の方々へも新聞への折り込みという形で配布させていただいています。発行部数は1万部であり、その活動費のほとんど、編集室を新潟日報の販売店から援助、提供していただいているというも、そよかせの特徴です。

部活、サークルや、学内イベントの取材と、記事の編集が主な作業となります。普段から多方面に取材を行って、紙面を作成していますが、時には独自の企画を紙面に盛り込み、単調な文面にならないように日々努力しています。

さて、私事ですが、友達に「説明会に一人だと不安だからついてきて!」と頼まれ、知らず知らずのうちに副部長をやらされる羽目になりました。こんな僕に大役を押し付けて!どうなっても知らないぞ!とかやっていたら、今回、新大広報にまで拙文を書くことになった次第です。みなさんも慎重にサークルは選びましょう。

最後は、サークルを紹介しているのか、自分の愚痴を言っているのか、何だかよくわからない文書になってしまいましたが、どこの部活、サークルに入っても、自分次第で楽しくも辛くもなります。もちろん僕が言わなくともわかっているかと思いますが、自分に合った場所を、みなさんが見つけれられるように心からお祈りして

おります。

長文を最後まで読んでいただきありがとうございました。ちなみにそよかせ編集室はとっても楽しいのでみなさん一度おいでください。できればメンバーになってください。4月から説明会をやっています。僕を早く引退させてください。嘘です。あー、新聞作りって楽しいな!



俺たち「そよかせ」!

たのしい編集作業中 本人は手前

